

南西諸島における「数の数え方」の調査(Ⅱ)

宮 崎 勝 式

はじめに

この調査は、先に発表した『南西諸島における「数の数え方」の調査(Ⅰ)』⁽¹⁾(以下、引用するときには調査(Ⅰ)と略称する)の続報である。

調査(Ⅰ)では、個数詞(ヒトツ、フタツ、ミツ、……)の琉球方言⁽²⁾について詳しく述べたが、この調査(Ⅱ)は、名数詞についての調査結果の一部である。

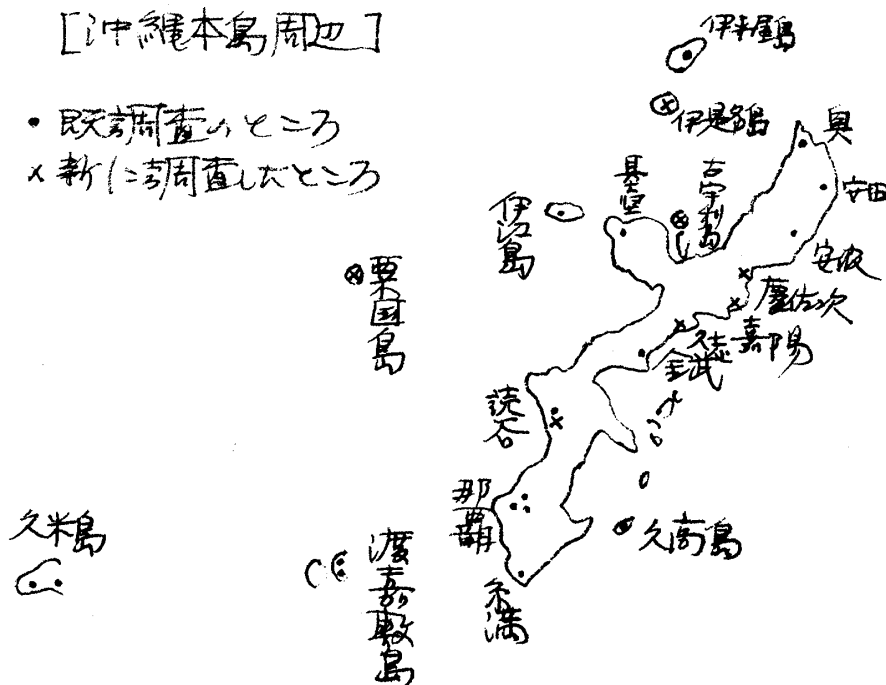
調査の焦点ならびに調査の方法については調査(Ⅰ)と全く同様であるからここではあらためて繰り返さないが、調査地は、その後更に範囲を拡げて、

沖縄本島及びその周辺では

粟国島(2)、伊是名島(2)、古宇利島(1)、東村慶佐次(1)、名護市久志(1)、名護市嘉陽

[沖縄本島周辺]

- ・既調査のところ
- ×新に調査したところ



(1) 宮崎勝式、南西諸島における「数の数え方」の調査(Ⅰ)、東京女子体育大学紀要第15号(p.165～177)。

(2) 奄美大島以南の南西諸島の方言を一括してここでは琉球方言と呼ぶことにする。

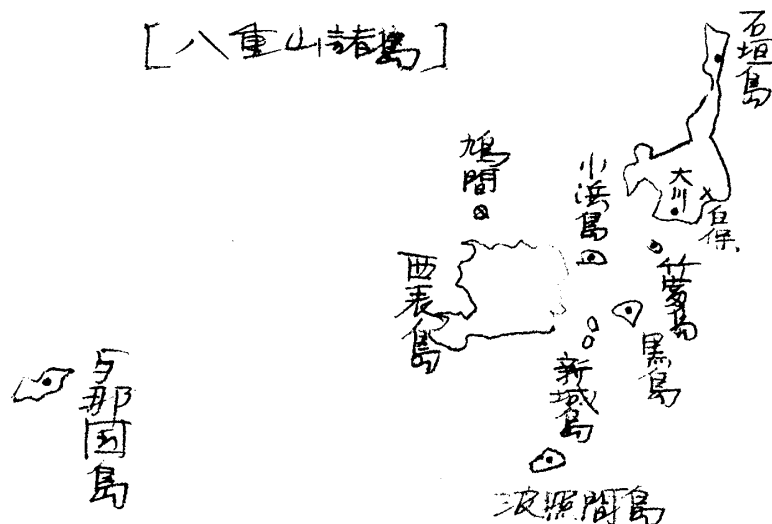
(1), 読谷村(1) 計7個所(9人)

八重山諸島では,

石垣市白保(1), 鳩間島(1) 計2個所(2人)

を新に訪問して調査した。

したがって, 現在までで総計 36 個所, 53 人の人たちから資料をいただいたことになる。



調査した内容

この報告(Ⅱ)でとりあげた内容は, 人数詞(ヒトリ, フタリ, サンニン, ……), 度数詞(イチド, ニド, サンド, ……) (但し, この度数は, 温度や経緯度の場合の度ではなくて, 物事を行う回数を表す。つまり, イッカイ, ニカイ, サンカイ, ……の回数を表すものである) の2つとした。

名数詞は, 当然のことではあろうが, 個数詞のあとに, 単位を示す名称をつけた形で表されるのがふつうである。

ところが, 琉球方言では, 個数詞は地域によって大巾にちがっている。それで地域ごとに個数詞と名数詞とを並べて比べるのがつごうがよいと思われるので, まず基本的な形が最も良く表されていると思われる度数詞を地域ごとにのべ, そのあとで人数詞をとりあげることにした。

度数詞について

A. 奄美諸島・沖縄諸島

まず, 琉球方言の標準語とも言うべき沖縄本島の首里地区⁽³⁾の場合についてくわしく述べ,

(3) 首里は昔琉球王の城のあったところ, 即ち琉球王国の首都であったから文化の中心であったのである。

そのあとでその他の地域の変化をのべよう。

度数詞について一般的に言われることは、次の表に示した数え方である。

	個 数 詞	度 数 詞
1	tiichi	<u>chuk</u> ēn
2	tāchi	<u>tak</u> ēn
3	miichi	<u>mik</u> ēn
4	yūchi	<u>yuk</u> ēn
5	ichichi	<u>ichik</u> ēn
6	mūchi	<u>muk</u> ēn
7	nanachi	<u>nanak</u> ēn
8	yāchi	<u>yak</u> ēn
9	kukunuchi	<u>kukunuk</u> ēn
10	tū	<u>tuk</u> ēn

この表で、右側の度数詞は、下線 ― をつけた部分が数を表しており、kēn は回(kai)という単位を表している。

したがって、この kēn の代りに適当な単位をつければ、その単位についての数え方を表すことになるのである。

例えば、面積の単位の坪(chibu)をつければ、

1坪	chu chibu
2坪	ta chibu
3坪	mi chibu
4坪	yu chibu
5坪	ichi chibu
6坪	mu chibu

となるのであり、また月数の単位月(chichi)をつければ、

1月	(ヒトツキ)	chuchichi
2月	(フタツキ)	tachichi
3月	(ミツキ)	michichi
4月	(ヨツキ)	yuchichi
5月	(イツツキ)	ichichichi
6月	(ムツキ)	muchichi
7月	(ナナツキ)	nanachichi
8月	(ヤツキ)	yachichi
9月	(ココノツキ)	kukunuchichi
10月	(トツキ)	tuchichi

となるのである。

さてこの度数詞が首里地区以外ではどのようなになっているかをみてみよう。

先ず奄美諸島では、

名瀬市(恵原義盛氏 M. 38)⁽⁴⁾

1回 chukeri 2回 takeri 3回 mikeri ……

沖永良部島(日置みね氏 M. 41)

1回 chukke 2回 takke 3回 mikke ……

次に沖縄本島及びその周辺では、

国頭村安田(宮城定盛氏 M. 37)

1回 tsukei 2回 takei 3回 mikei ……

名護市久志(宮城正誠氏 M. 27, 同マカ氏 M. 26)

1回 chukei 2回 takei 3回 mikei ……

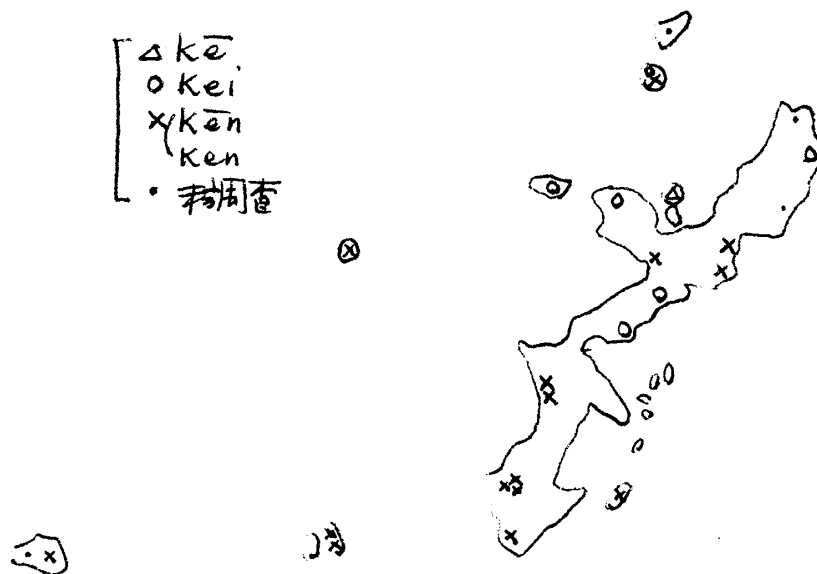
古宇利島(諸喜田マチ氏 M. 36)

1回 chuke 2回 take 3回 mike 4回 yuke ……

本部町具志堅(安里寿氏 M. 39)

1回 chukei 2回 takkei 3回 mikkei 4回 yukkei ……

以上の資料で見るように、首里地区で kēn と言われている回数を表す言葉は地域により多少変形はしているが、奄美諸島、沖縄諸島で使われている。そのうち特に多い kēn と kēi の分布は図のとおりである。



B. 八重山諸島

八重山諸島は、島が多く、その島ごとに個数詞にもかなりのちがいが見られるので、それぞれの島について、個数詞と度数詞とを並べて比べてみよう。

(4) 地名のあとの人名はその資料を提供してくださった方でありその際Kは慶応, Mは明治, Tは大正で、その方の生年を表す。以下も同じ。

石垣市大川(宮良信氏 M. 29)

	個 数 詞	度 数 詞
1	ptiizu	<u>pit</u> ugen
2	futāzu	<u>fut</u> agen
3	miizu	<u>mis</u> ugen
4	yūzu	<u>y</u> ugen
5	itsutsu	<u>its</u> ugen
6	n̄zu	<u>m</u> ugen
7	nanatsu	<u>nan</u> agen
8	yātsu	<u>y</u> agen
9	kukunutsu	<u>kukun</u> ugen
10	tū	<u>t</u> ugen

石垣市大川の場合は、回数を表す言葉は gen である。

そして、この gen は沖縄本島の ken の k が 有声化しただけだと考えすることはできないだろう。 ken → gen

同じ石垣市でも東海岸の白保では、

石垣市白保(宮良松氏 M. 36)

	個 数 詞	度 数 詞
1	pititsu	<u>pit</u> umusu
2	futattsu	<u>fut</u> amusu
3	mittsu	<u>mi</u> imusu
4	yuttsu	<u>y</u> ūmusu
5	issu	<u>it</u> sumusu
6	n̄tsu	<u>n̄</u> musu
7	nanatsu	<u>nan</u> amusu
8	yātsu	<u>yā</u> musu
9	fukunutsu	<u>fukun</u> umusu
10	tū	<u>t</u> ūmusu

であった。

語幹にも大川とは多少のちがいはあったがそれよりも、回数を表す言葉が gen とは似ても似つかぬ musu であったのには驚いたのであった。

波照間島(登野城寛宏氏 M. 39, 西白保八重氏 T. 5, 貝敷文雄氏 T. 5)では、

	個 数 詞	度 数 詞
1	ptūtsu	<u>pit</u> umusi
2	futātsu	<u>fut</u> amusi
3	miitsu	<u>mi</u> imusi
4	yūtsu	<u>y</u> ūmusi
5	issu	<u>iss</u> umusi

6	ntsū	<u>mu</u> imusi
7	nanatsu	<u>nan</u> amusi
8	yātsu	<u>y</u> amusi
9	hakonatsu	<u>hak</u> onamusi
10	tū	<u>tū</u> musi

となって回数を表す言葉は、石垣市の白保によく似て musi となっている。

更にまた、山猫で有名になった西表島の北方の孤島である鳩間島では、
鳩間島（大城サカイ氏 M. 36）

	個 数 詞	度 数 詞
1	piichi	<u>p</u> smushi
2	futāchi	<u>f</u> utamushi
3	miichi	<u>m</u> imusi
4	yūchi	<u>y</u> ūmusi
5	ichichi	<u>i</u> tsumushi
6	mūchi	<u>m</u> ūmushi
7	nanachi	<u>n</u> anamushi
8	yāchi	<u>y</u> amushi
9	kunuchi	<u>k</u> unumushi
10	tū	<u>tū</u> mushi

となって、回数を表す言葉は mushi または musi となっている。

次に与那国島では、

与那国島（浦崎栄昇氏 M. 32）

	個 数 詞	度 数 詞
1	tūtsi	<u>t</u> umudutsi
2	tātsi	<u>t</u> amudutsi
3	miitsi	<u>m</u> imudutsi
4	dūtsi	<u>d</u> umudutsi
5	itsitsi	(<u>i</u> tsimudutsi)
6	mūtsi	(<u>m</u> umudutsi)
7	nanatsi	(<u>n</u> anamudutsi)
8	dātsi	(<u>d</u> āmudutsi)
9	kugunutsi	(<u>k</u> ugunumudutsi)
10	tū	(<u>tū</u> mudutsi)

となっている。

ここで itsimudutsi からあとに（ ）をつけてあるのは、かんじょうすればそうなるけれども、実際には4回ぐらいまでで、そんなに多くの回数を必要とすることは昔の生活には無かったと浦崎氏は言われたのであった。

さてこの与那国島での回数を表す mudutsi については、調査した折には、変な言葉だ、

よく意味がわからないと考えていた。

石垣市の白保の musu

波照間島の musu

鳩間島の mushi または musu

は共通のものであることはわかるが、この mudutsi には面くらったものであった。

ところが、その後沖縄本島で、名護市嘉陽の翁長ウシ氏(M. 30)と面接したとき、また伊江島の知念牛助氏(M. 14)に面接したときの資料をくりかえしてきいていたときお二人とも、1回、2回、……のことを、

chumudusi, tamudusi, ……

ともいうと言われたのに気付いた。

それで、私は、この mudusi は「戻し」ではあるまいか。つまり、

ヒトモドシ、フタモドシ、……

というような意味ではないかと気付いた。

そこで琉球大学の仲松竹雄教授⁽⁵⁾におたずねしたところ、「mudusi は往復という意味である、物を運ぶときなど、1往復、2往復、……することを1回、2回と教えるときに、

chumudusi, tamudusi, ……

というのですよ」と教えられた。だが

白保の musu

波照間島の musu

鳩間島の mushi または musu

がこの mudutsi と関係があるか無いかはまだわからない。

しかしいずれにせよ、沖縄本島の kēn、石垣市大川の gen とはどうも意味がちがうような気がするので再調査研究をしたいものと考えている。

人数詞について

度数詞については上に述べてきたところからわかるように、度数詞の語幹と個数詞との関連がはっきりしている。

それよりも語尾につく回に当たる言葉の方がいろいろ変化して研究対象となっている。

人数詞になるとちがった面の変わり方がある。

先ず標準になる沖縄本島首里地区の数え方をあげよう。

首里(多和田真淳氏 M. 40, 玉城仁用氏 M. 42)では、

1人 chui

2人 tai

3人 mitchai

4人 yuttai

(5)「沖縄語の文法」の著者であり琉球方言に詳しい。

5 人	gunin	(ichitai)
6 人	rukunin	(muttai)
7 人	shichinin	(nanatai)
8 人	hachinin	(yattai)
9 人	kunin	(kukunutai)
10 人	jūnin	(tuttai)

というように数える。

4人までは

chu ta mi yu

と度数詞と同じになっているが、5人から先は琉球方言の特徴である母音 o → 母音 u の規則で

5 (go → gu) 6 (roku → ruku)

7 (shichi) 8 (hachi) 9 (ku) 10 (jū)

のあとに人 (nin) がついている。

かっこの中に示してある

ichitai muttai nanatai ……

は度数詞の時にあげた

ichi (5) mu (6) nana (7) ya (8) kukunu (9) tū (10)

のあとに人数を示す tai をつけたもので、古い形であり、現在でも後に示すように(172ページ)地域によっては残っている。

人数詞の語尾の nin (人) は日本語⁽⁶⁾と同じだから説明する必要はないと思うが、i または tai について一言ふれておこう。

tai が日本語のタリ (人) に当たるということは

フタリ (2人) ヨッタリ (4人)

などと比べて見当のつくことであろう。

日本語では現在は

ミタリ, ヨタリ, イッタリ, ムタリ, ……

などとは言わないのに琉球方言に mitchai, yuttai, ichitai, …… ということから、日本語でも古くには、ミタリ, ヨタリ, ……と言ったのであろうことが考えられる。

現に広辞苑などには、

みたり〔三人〕 さんにん よたり〔四人〕 よったり, よにん

等がのっている。

さて、もう一つ、4人までは chu, ta, mi, yu ときて、なぜ5人から先は nin になっているかについて、日本語の人数詞を対比して考えてみよう。

先ず日本語の人数詞をあげよう。

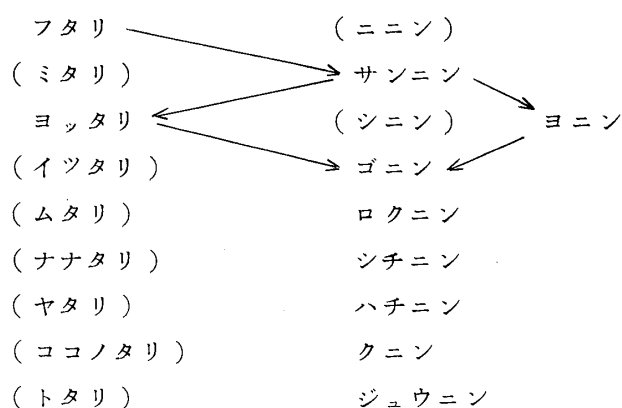
和 数 詞⁽⁷⁾

漢 数 詞

ヒトリ

(イチニン)

(6) 調査 (I) でも注意したように、琉球方言に対して本土方言というのが適切かもしれないが、調査 (I) にならって日本語と呼ぶことにした。



琉球方言も日本語の場合も両方とも5人から先が漢数詞になっていることは無関係ではないと考えられる。

明治以降、琉球方言を使わないように、小学校から強制的に日本語化をしたことが影響していると考えるのは強ちこじつけとばかりは言えないであろう。

次に地域別に人数詞について調べた結果をのべよう。

A. 奄美諸島

名 瀬 市

	藤村政暁氏 (M. 33)	恵原義盛氏 (M. 38)	屋井常三氏 (T. 3)
1 人	chūri	churi	churi
2 人	tāri	tari	tari
3 人	mishāri	misari (misahari)	mishari
4 人	yutāri	yutahari	yutari
5 人	ishtāri	isutari	ichitari
6 人	mutāri	motari	mutari
7 人	— (9)	nanatari	nanatari
8 人	—	yatari	—
9 人	—	kukunutari	—
10 人	—	tutari	—

名瀬では人数を表す言葉は tari である。これはいわば日本語と琉球方言の橋わたしの役をしているものと考えられる。

徳 之 島

	泉重千代氏 (K. 元)	小林政秀氏 (M. 37)
1 人	churi	chui
2 人	tari	tai
3 人	mittari	michai

(7) 調査 (I) では左の数え方をAの数え方、右の数え方をBの数え方として区別したが青山学院大学の安田尚道氏の呼称⁽⁸⁾に従って今後和数詞、漢数詞と呼ぶことにする。

(8) 安田尚道「古代日本語の数詞をめぐって」, 言語第7巻1号 p.79 大修館発行

(9) 空らんは記録のテープが不分明であったので削除したものである。

4人	yuttari	yutari
沖永良部島		
	日置みね氏 (M. 41)	永吉 毅氏 (M. 42)
1人	chui	chui
2人	tai	tai
3人	michai	mitchai
4人	yuttai	yuttai
5人	ichitai	ichitai
6人	mutai	
7人	nanatai	
与 論 島		
	野口万蔵氏 (T. 6)	竹下茂徳氏 (M. 37)
1人	chui	chui
2人	tai	tai
3人	(mitchai) michai	mitchai
4人	yuttai	yuttai
5人	ichitai	ichitai
6人	mutai	muttai
7人		nanatai
8人		yattai
9人		kunutai

以上の奄美諸島の資料からまとめられることは、

奄美大島では tari

徳之島では tari または tai

沖永良部以南では tai

ということである。

これは調査(I)の17ページで奄美大島と徳之島は方言的に見て本土に近く、沖永良部島と与論島は沖縄に近いということを裏付ける一つの資料と考えられよう。

B. 沖縄本島及びその周辺

国頭村奥(宮城親昌氏 M. 34)

1人 tui 2人 tai 3人 misai 4人 yutai 5人 ichitai

国頭村安田(宮城定盛氏 M. 37)

1人 tsui 2人 tai 3人 mittsai 4人 yuttai

5人 ihitai 6人 muttai

伊江村(知念牛助 M. 14)

1人 chui 2人 tai 3人 nchai 4人 yuttai 5人 gunin

本部町具志堅(安里 寿 M. 39)

1人 chui 2人 tai 3人 mitchai 4人 yuttai 5人 hichitai
6人 muttai 7人 nanatai 8人 yattai 9人 kunutai
10人 tuttai

そして、以下の人々はすべて同じ数え方をされた。

名護氏久志(宮城正誠氏 M. 27, 同マカ氏 M. 26), 名護市嘉陽(翁長ウシ氏 M. 30)
古宇利島(諸喜田マチ氏 M. 36), 読谷村(金城太郎氏 M. 19)
粟国村浜(伊佐永篤氏 M. 33), 渡嘉敷村(棚原清助氏 M. 27, 玉城重保氏 M. 38)
糸満市(大城寛祐氏 M. 30)

即ち,

1人 chui 2人 tai 3人 mitchai 4人 yuttai
5人 ichitai 6人 muttai 7人 nanatai 8人 yattai
9人 kukunutai 10人 tuttai

そして、これと近いのが,

東村慶佐次(知念松竹氏 M. 34), 伊是名村(東江清蔵氏 M. 37)

で, nanatai のあと hachinin, kunin, …… と言われた。

また、次の人達、即ち,

伊是名村(伊礼幸正氏 T. 7), 金城村(宮里武英氏 M. 40, 小橋川朝蔵氏 T. 7)
知念村久高(西銘カメ氏 M. 30)

は9人 kukunutai までは同じだが、10人は tuttai といわず jūnin と言われた。

そして、次の人たち

読谷村(屋良朝乗氏 M. 25), 久米島具志川村(宮里正光氏 M. 40)
伊平屋村(池田松永氏 M. 42), 名護市名護(比嘉宇太郎氏 M. 36)

は、首里と全く同じで、

chui, tai, mitchai, yuttai

の次は gunin, rukunin, ……

と数えられた。

以上のことから判断、推測できることは、ずーっと古くは、

chui, tai, mitchai, yuttai, ichitai, muttai, …… , tuttai

であったが、明治以後の日本語とのかかわりあいの中に次第に10人から、8人から、5人からというふうに移ってきたのであろうということである。

そうして、

chui, tai, mitchai, yuttai

までが残っているのも、日本語の

ヒトリ, フタリ, (ミタリ), ヨッタリ

と共に残っていると解しても良いのではなかろうか。

C. 宮古諸島

宮古諸島については資料が少ないので次の2人だけをあげておこう。

多良間島（渡久山春好氏 T. 10） 宮古島（浦崎安常氏 M. 38）

1人	toke	
2人	futaru	futāzu
3人	mstar	mitsāzu
4人	yutar	yutāzu
5人	iktar	itsunuptu
6人		muyunuptu
7人		nananuptu
8人		yanuptu
9人		kukununuptu
10人		tūnuptu

そして渡久山氏の場合の tar はタリであろうと推察されるが、それよりも更に興味深いのは、4人までと5人以上のちがいである。

5人 itsu nu ptu

は明らかに「イツツ ノ ヒト」であろう。

そしてこれもまた5人からあとが ～nuptu（……ノヒト）となっているのは面白い。

D. 八重山諸島

石垣市では

大川（宮良信氏 M. 29） 白保（宮良松氏 M. 36）

1人	pitureu	piturei
2人	futāru	futari
3人	mistāru	mittari
4人	yuttāru	yuttari
5人	itsutaru(itsuptu)	isutari
6人	muyuptu	ntari
7人	nanaptu	nanatari
8人	yāptu	yattari
9人	kukunuptu	kukunutari

この2人の数え方を比べてみると、白保の方は1人から9人まで …タリ で一貫しているのに反し、大川の方は5人から先が ptu つまり …ニン に当たる数え方であることは白保が田舎で、大川が市の中心で日本語に近かったのだらうというような推察もできて興味深い。正しい結論はもう少し研究してからでないといえないと思うが。

次に八重山諸島の各々の島の数え方をあげよう。

波照間島（登野城寛宏氏 M. 39，西白保八重氏 T. 5，見敷文雄氏 T. 5）

1人	piturei	2人	futari	3人	mitāri	4人	yutāri
5人	itsupitu	6人	muipitu	7人	nanapitu	8人	yapitu

9人 hakonapitu 10人 zūnin

黒島 (神山忠義氏 T. 5)

1人 psuru 2人 futaru 3人 mittsāru 4人 yutāru
5人 itsiipisu 6人 ŋpisu 7人 nanapisu 8人 yāpisu

小浜島 (宮城真清氏 M. 35)

1人 pstāru 2人 futāru 3人 mitāru 4人 yutāru
5人 itstāru gunin
6人 mutāru rukunin
7人 shichinin
8人 pachinin
9人 kunin
10人 jūnin

竹富島 (上勢頭亨氏 M. 43)

1人 tama 2人 futai 3人 mitai 4人 yutai
5人 ichitai 6人 mutai

与那国島 (浦崎栄昇氏 M. 32)

1人 tui 2人 taintu 3人 ntaintu 4人 dutaintu
5人 gonin 6人 rukunin

鳩間島 (大城サカイ氏 M. 36)

1人 pstru 2人 futaru 3人 mitsaru 4人 yutaru
5人 gunin 6人 rukunin

八重山諸島を一わたり見て感ずることは、

- a. 白保と竹富は1～9すべてタリの形
- b. それ以外は1～4まではタリの形, 5以後はニン(ヒト)の形

だといえるということである。

そして特に5以後は波照間と黒島とは宮古や石垣市大川と同じくヒトの形である。

そして、琉球方言全体が、このa, bの2つのどちらかに属していると言える。

更には日本語と関係が近い程(b)の形になっているという気がする。

これらが、どのようにつながり合っているのかを調べるのは今後の問題である。